■川合戦の場所

昭和52（1977）年に復活した現在の虫追い祭りは、夜、巨瀬川で合戦をします。これは、田主丸町中心部5地区の虫追いの伝統を引き継いでいます。

ただし、川に入る場所は異なっています。現在は中央橋の東側で行われますが、昭和39（1964）年以前は橋の西側でした。『虫追資料』にある昭和26（1951）年の虫追い進行順路図からも確認できます。橋の西側には中洲があって合戦に適していたそうです。

以前は、あらかじめ大石長野堰の管理事務所に依頼して、上流の明石田堰の水を止めてもらい流量を減らしたそうです。

川合戦は、他の地区でも行われていました。蔵八村（現在の蔵町・松原地区）の明治3（1870）年の記録に「巨瀬川の橋下で大合戦」とあります。

田主丸町中心部の5地区でいつから川合戦をやっていたのか。それを示す資料は見つかっていません。

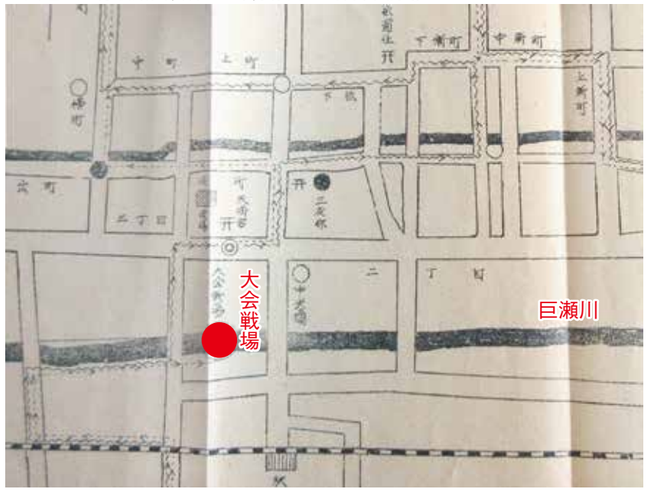
『田主丸町誌 第一巻』に川合戦を描いた大正9（1920）年の屏風が紹介されていますが、そこに描かれた人々は江戸時代の姿です。時代設定を置き換えただけかもしれませんが、町中心部では江戸時代から川合戦をしていた可能性がありそうです。

町中心部の5地区では、川合戦で虫追いが終わると、大馬は河原にすえ置き、実盛人形は倒したまま、手塚人形は川土手に立てておいた、とのことです。そして、翌日以降に、人形も馬も解体しました。

ところが、中心部の氏神さまの田主丸天満宮には、50～60年以上前のものと言われる手塚人形が残されています。もしもこれが田主丸町中心部5地区で最後に使った昭和39年の人形ならば、当時の作りが確認できる大変貴重な資料となります。

▼巨瀬川の川合戦（昭和30年代）E

▼虫追い進行順路図(昭和26年)。赤丸が川合戦場。③



■田主丸虫追いの知名度

以上のように全国でも例を見ない田主丸の虫追いですが、今まで、どの程度知られていたのでしょうか。

『浮羽めぐり』（篠原正一、昭和10年）が詳しく引用していますが、日本民俗学を確立した柳田国男が、雑誌『民俗』で、浮羽郡（現田主丸町とうきは市）の虫追いを紹介しました。柳田によって、全国の研究家には田主丸の虫追いが知られたのではないでしょうか。

『虫追資料』は、昭和26年10月の毎日新聞で、民俗学研究者の梅林新市が田主丸虫追いを紹介した記事も引用しています。

テレビでも紹介されました。昭和43（1968）年5月23日、NHKの生放送番組で、宮田輝司会の郷土芸能を紹介する『ふるさとの歌まつり』が福岡県立明善高等学校から中継されました。その時に、総勢約40名で虫追いを披露したのです。

この時は、怒田・中舎館・口高・板町・桜町・栄町四丁目で構成される豊城虫追行事保存会による虫追いでした。出演者の中には、後に昭和52年の虫追い復活の際の人形踊りを指導した人もいました。

結局、同じ時に出演した久留米出身の作曲家・中村八大の場面が長引いて、虫追いがステージに上がった途端「田主丸の皆さんでした」と言われたほど短い出演になってしまったそうです。とは言え、当時の人気番組に出たのですから、田主丸の虫追いが全国に知られたのではないでしょうか。

以上、江戸時代に始まる田主丸の虫追いについて、その歴史を昭和39（1964）年まで追いかけてきました。残念ながらその年を最後に、田主丸の虫追いは途絶えてしまいました。

その中断した虫追いを13年後の昭和52（1977）年、田主丸町農業協同組合の青壮年部とパイオニアクラブが復活させたのです。そして、これが現在の田主丸虫追い祭りの記念すべき第1回となりました。

第3章 昭和52年虫追い復活物語
～農協若手の奮戦記～

■半世紀続く農協虫追い祭り

地元による田主丸の虫追いは、昭和39（1964）年を最後に途絶えてしまいました。

それを13年ぶりに「虫追い祭」として昭和52（1977）年に復活させたのが、田主丸町農業協同組合の青壮年部とパイオニアクラブという若手組織でした。当時、青壮年部は30代から45才までの約220名、パイオニアクラブは20代の約120名の会員で構成されていました。

田主丸町農協が平成8年（1996）に浮羽町と吉井町の各農協と合併して「JAにじ」になった以降も、田主丸地区青年部とパイオニアクラブは虫追い祭りを続けてきたのです。

農協の若手達は、どのように虫追いを復活させたのでしょうか。振り返ってみましょう。

※注：これ以降、田主丸町農業協同組合を「田主丸町農協」、パイオニアクラブを「パイオニア」と略すことがあります。また、役職は祭り開催当時のものです。

▼田中嘉津美さん

▼清水良則さん

■きっかけは郷土の勉強会

昭和52年当時、田主丸町農協の青壮年部もパイオニアクラブも、活動方針の一つに「地域社会活動と文化活動」を掲げていました。そこで、農協広報福祉課の田中嘉津美課長がパイオニアクラブに、地域の伝統芸能で何か後世に残そうではないか、と働きかけました。

パイオニアクラブは役員会で討議しました。すると役員の一人から「虫追いはどうか。年貢の減免を求めたり、ウンカ退治など農業に関連する祭りじゃないか」との発言が出たのです。この一言がきっかけで虫追い復活が動き出しました。

この役員会は9月10日に行われたと思われます。驚くべきは、この役員会のたった1カ月半後の10月22日には、虫追い祭を開催したのです。虫追いの経験が全く無く、人形も大馬も無い状態から、どうしてこんな短期間で開催できたのでしょうか。

■開催18日前 開催を正式決定

虫追い祭の開催が正式に決定されたのは10月4日、青壮年部とパイオニアクラブの合同会においてでした。

合同会では、人形踊りに10日の練習が必要となれば農作業に支障が出る、と反対意見も出されました。しかし、最終的には、パイオニアクラブが人形踊りと鐘太鼓を担当することで虫追い祭開催が正式に決定したのです。

面白いことに、この合同会では人形だけの虫追い祭が提案され、大馬は想定されていませんでした。

■開催16日前 大馬を知る

2日後の10月6日、パイオニアクラブの約50名が、虫追いを勉強しに農協に集まりました。元田主丸町長で田主丸の歴史に詳しい行徳平八さんが虫追いの由来を解説しました。

さらに、農協青壮年部竹野支部の清水良則支部長が田主丸町教育委員会から借りてきた8ミリフィルムを自ら映写しました。フィルムには昭和39年に田主丸町中心部の5地区（村島・馬場・港町・栄町二丁目・栄町三丁目）で行われた虫追いが収められており、保育園や町役場、小学校などで演技する場面が出てきました。

▼池尻和守さん

▼今村重徳さん

フィルムは無声でしたが、クラブ員達は虫追いの熱気にぐっと引き込まれ、一気に皆が「やるぞ！」と意気投合しました。

一方、フィルムで最も衝撃を受けたのが、勇壮に動き回る巨大な大馬でした。ここで初めて大馬の存在を知ったのです。皆「虫追いとは馬が出るとね。人形だけでは祭りにならんね」と考え込んでしまいました。

その時、パイオニア今村重徳副会長が池尻和守会長に「馬まで作ろうや。自分が図面を描いて田中課長にやらしてくれ、と言うけん」と提案したのです。池尻会長は「フィルム見ただけで出来るのか」と問いますが、今村副会長は即座に「出来る」と。こうして大馬製作が急浮上したのです。

馬作りを了解した田中課長は永松憲一青壮年部長と相談、青壮年部が馬を担ぐことに決まり、馬作りにも参加する会員が出てきました。大馬の登場で、青壮年部の祭りへの関わりが深まり、青壮年部とパイオニアクラブの一体感がさらに強まりました。

虫追いを知らぬ若者達さへ奮い立たせたという点で、その8ミリフィルムは田主丸最大級の歴史遺産と言えるでしょう。